

ラウンドテーブルディスカッション

伝統医薬の創造的継承

司会	小橋 恭一	前理事長
基礎系	荻原 幸夫	名城大学・薬学部
//	済木 育夫	富山医科薬科大学・和漢薬研究所
臨床系	花輪 壽彦	北里研究所・東洋医学研究所
//	三潑 忠道	飯塚病院・東洋医学センター・漢方診療科

小橋 恭一

千年にわたる草根木皮の医薬としての知識の積み重ねは、20世紀における科学化で著しく進展した。新薬はその大部分が積み上げた知識の科学化を根として生まれたが、分析的手法と経済的理由から見過ごされた知識も少なくない。注射を前提とした「ふりかけ薬理」は経口という前提を無視し、特許中心の化学から、生物としての人の多成分系や個体差の「証」をなおざりにしてきた。これからの新世紀に向かって、和漢薬研究のあるべき姿は、この三つの前提を解きほぐすものでありたい。

荻原 幸夫

健康は自ら守るセルフメディケーションの時代を迎えつつある。科学的物質文明全盛の現代社会に色々な綻びが目立ち始めた今日、人間の自然な営みの中から経験的に生み出された伝統医学が、再評価されつつあるが、言うまでもなく、最も体系化された漢方医学が主役である。その薬物手段としての漢方方剤は、医食同源の思想に基づき多剤多義の発想で創造された薬物で、対症(対処)療法を目的に一剤一義の発想で創薬された西洋医薬品とは、本質的に異なる。漢方方剤の薬物としての特性について解説する。

済木 育夫

漢方医学における体質や症候を含む、いわゆる証(病態の変化)を西洋医学的に解明することは、東洋医学の『個の医療』すなわち現代医学的なテーラーメイド医療に理論的基盤を付与するという意味で極めて重要である。その一つの試みとして、発現プロテオミクス研究の技術導入により、病態の変化(証)に影響する生体タンパク質、さらに疾患に関連するタンパク質の発現プロファイルや機能を解析して、証に特徴的な主要マーカータンパク質を同定する。これらのマーカーと患者の属性情報を統合し、データベース化することが重要であると思われる。

花輪 壽彦

「証」は個体差を重視するが、「科学化」を否定するものではない。むしろ経験医学の真価は「科学の発展」によって初めて裏づけられる。

現代医療の中では「漢方」の診察は「各種生理検査」など現代医学的方法によって補完されている。漢方独特の病態の捉え方も科学的根拠を与えられ、「普通の医学」の一つの選択肢となると思う。また「自然治癒力」を重視する漢方の考え方の中で「胃腸」の働きを殊のほか大切に理由を明らかにしていきたいと考えている

三瀨 忠道

漢方診療の事実を現代に通用する手段で記録し、基礎研究あるいは更なる臨床応用に資するのが臨床側の責任である。そのために、重症患者も診療可能な総合病院で、病棟での漢方治療を実施できる施設を目指している。診療方針は、1) 診断と経過観察は現代医学的に十分実施、2) 治療は生薬中心の漢方方剤を第一選択、3) 漢方治療は随証を基本、4) 必要に応じて現代医療も使用する。結果として、漢方医学の効能が現代語で表現(翻訳)され、また東西医学を融和した医療体系へとつながり、臨床実習の場ともなる。